

レギュレーション学派における「国際レジーム」 概念の生成（上）

— J. ミストラルの所説に寄せて —

奥村和久

はじめに：問題の所在

1. ミストラルの国際レジーム概念（「国際レジームと国民的諸軌道」）の再構成

1.1 「諸国民経済と国際経済」の再構成

1.2 「国際レギュレーション諸形態」の再構成

1.3 「国際レジームの移行」と「結論：袋小路か、進路変更か？」の再構成

（以上本号，以下次号，次々号）

2. ミストラルの国際レジーム概念の特徴とそれが切り開いた地平

2.1 レギュレーション学派の基礎概念の国際領域への移植

2.1.1 「成長（蓄積）レジーム」と「国際分業地図」

2.1.2 「制度（構造）諸形態」「レギュレーション様式」と「国際レギュレーション諸形態（国際構造諸形態）」

2.1.3 「発展様式」と「国際レジーム」

2.1.4 「危機」概念の国際領域への適用

2.1.5 覇権国の生産・消費規範への各国の適合能力の相違 = 「国民的諸軌道」の分岐

2.2 アメリカ国際レジーム学派との交差とミストラルの独自性

2.2.1 アメリカ国際レジーム学派（= 国際政治経済学 IPE）との交差

2.2.2 クラズナーとミストラル

2.2.3 覇権安定論（キンドルバーガー／ギルピン）とミストラル

2.2.4 「狭義」の国際レジーム論（コヘイン）とミストラル

まとめに代えて

はじめに：問題の所在

本稿の目的は、レギュレーション学派において包括的な国際領域を先駆的に扱い、かつ「国際レジーム」概念を嚆矢として提起したミストラルの国際レジーム論を検討し、あわせて、その特徴と彼が切り開いた地平を浮き彫りにすることである¹⁾。

1) Mistral の理論系列に属する Vidal [2002] pp. 171-3 は、実質的に国際レギュレーションを扱うものとして3つのアプローチを紹介している。第一は、「グルノーブル・レギュレーション学派」であり、第二が「パリ・レギュレーション学派」である。そして第三は、レギュレーションという用語を使用して

第二次大戦後の先進国の高度成長とその危機をフォーディズムという同一の分析装置で成功裡にとらえたレギュラシオン学派も、当初より国際領域に割り当てられた分析は弱い分野と見なされてきた。レギュラシオン学派は、「国際レジームへの参入形態」を、「貨幣制約の諸形態」、「ラポール・サラリアル（賃労働関係）の構図」、「競争の諸形態」、「国家の諸形態」とあわせて五大制度諸形態としてあげているにもかかわらず（Boyer [1987] pp. 48 55 ; 77 85ページ）、その分析の重点は、「フォーディズムの動態とレギュラシオンが作用した主要先進諸国の国民的空間」（Vidal [1998] p. 89）にあったからである²⁾。

また、国際分野に対する分析の弱さは、先進国の高度成長期において国民経済の相対的自立性が支配的であり、ラポール・サラリアルが他の制度的諸形態に対して規定的役割を果たしていた時期から、90年代以降グローバリゼーションの時期を迎え、五大制度諸形態の総体に影響を及ぼすヒエラルキーの急変が生じ、国際レジームへの参入がヒエラルキーの頂点へと転換したとされても（Boyer [1999]）、依然として変わらない³⁾。またアグリエッタにみられるように（Aglietta [1998] [1999]）、事実上、グローバリゼーションを起点として「資産形成成長レジーム」が分析されているにもかかわらず、包括的な国際領域の分析は、同様の事態が続いている^{4) 5)}。また、制度と制度的構造の変化、および各国の国際比較において精緻化を伴うレ

はいないが、アメリカの国際関係論分野で生まれた「アメリカ国際レジーム学派」である。本稿が直接、対象とするのはパリ・レギュラシオン学派であり（以下、レギュラシオン学派と略）、また *Mistral* の切り開いた地帯を明らかにするところでは、「アメリカ国際レジーム学派」にも言及する。ところで、次々稿で検討するように、アメリカの国際関係論の分野で1970年代に発展してきた国際政治経済学 IPE (International Political Economy) は、その二大潮流であるネオリアリズムの潮流に属する「覇権安定論」とネオリベリズムの潮流に属する「国際レジーム論」を生み出した。だが、レギュラシオン学派において国際レジーム論を直接に検討している *Mistral* も *Vidal* も、覇権安定論をも広い意味において国際レジーム論に含めているため、本稿もそれを踏襲した。したがって本稿では特に断りない場合は、厳密さを欠くとはいえ、「アメリカ国際レジーム学派」に覇権安定論も含まれている。また本稿の「アメリカ国際レジーム学派」という名称も、*Vidal* の命名をそのまま採用している。

- 2) 国際分野に関する論争を掲載した *L'annee de la regulation*, vol. 2 において、レギュラシオン学派にとって国際領域の分析が弱い環であるという指摘は、レギュラシオン学派以外からもなされている（Kebabdian [1998], Palan [1998]）。
- 3) このようにグローバリゼーション期を迎えて国際レジームがヒエラルキーの頂点に位置するようになったとする見解には、Fourquet [2004] のように壮大な Braudel [1979] の「世界 = 経済 *economie-monde*」を援用しながら、「国際関係は常に支配的である」とする批判も *L'annee de la regulation*, vol. 8 に掲載されている。
- 4) Aglietta [1998] の「資産形成成長レジーム」については、安孫子 [2012] 付論が的確な紹介・検討をしている。
- 5) 通例、グローバリゼーション期の制度諸形態の配置構造の頂点に立つのは、Boyer が国際レジーム、Aglietta が金融、Petit が広い意味での競争として紹介されている（山田 [2008]）。なおここで、Petit の「広い意味での競争諸形態の変容」は、とりわけ Aglietta/Brender [1986] の「勤労者社会の転換」（Petit [1998] p. 180）を踏まえてのことである。

ギュラシオン学派の第二世代に関しても、事態は変わらないままである^{6) 7)}。

したがって、レギュラシオン・アプローチの射程を国際分野へと広げ、それを包括的に扱ったレギュラシオン学派の三系列を紹介・検討することは、依然として今日的課題である。まず第一の系列には、国際レジーム概念を正面から扱ったミストラル、およびその後継者たちであるマジェノバル/ヴィダルが属する。第二の系列には、リピエツが位置する。彼は国際レジーム概念には懐疑的ではあるが、レギュラシオン学派のフレームワークの中に、「流血的テラー主義」と「周辺部フォード主義」という独創的概念を導入し、国際分業の射程を南北問題にまで広げ、「世界的な構図」(Lipietz [1985] p. 39 ; 60ページ)を描いている。第三系列には、国際レジーム概念には言及していないが、途上国の類型化を構築し、国際分業における先進国と途上国の役割をパクス・ブリタニカ期とパクス・アメリカナ期において特徴付けることによって、国際分業の射程をさらに歴史にまで広げ、その変遷を分析したオミナミがいる^{8) 9)}。

6) この二領域におけるレギュラシオン学派の Amable [2003] を中心とした紹介については、安孫子 [2012] 第 部、原田 [2005a] [2005b] [2005c] 山田 [2008] 第 7・8 章を参照。

7) もう一つレギュラシオン学派による分析が希薄な分野は、国家の諸形態であった。「社会的諸規範を要約する国家」(Aglietta [1976])、あるいは「レギュラシオンの原基形態としての国家」Lipietz [1985]、あるいはまた「構造諸形態の配置構造の過程を形成する国家」(Petit [1998]) として、国家はその重要性が折りに触れて語られてきた。しかしながら、レギュラシオン学派の初期の著作においては、「特に国家に割り当てられた章はなく……国家は制度諸形態の様々な介入領域に応じて切り分けられて論じられており、そのものとしては分析されてこなかったのである」(Vidal [1998] p. 88)。なお、この間の国家論研究の経緯については、若森 [1996] 第 6・7・8 章を参照。そしてもっと後になって国家論は、「制度化された妥協総体」(Andre/Delorme [1983], Delorme [1984]) である国家として、あるいは「租税国家」(Theret [1992]) として本格的に分析されることになる。なお、Theret を中心にしてレギュラシオン学派の国家論を紹介・検討した労作として中原 [2010] を参照。

8) グルノーブル・レギュラシオン学派とパリ・レギュラシオン学派の国際分業論を検討した Robles は、パリ・レギュラシオン理論を、国際領域にまで広げた人物として、Mistral と Lipietz の二人のみを挙げている (Robles [1994] pp. 110 11, p. 127)。また若森 [1996] 序章は、インターナショナル次元でレギュラシオンを研究した者として Aglietta, Mistral, Lipietz, Ominami を挙げている。本稿はレギュラシオン理論のその後の展開、および国際レジーム概念に対する各論者のスタンスの違いを考慮して、三系列とした。

9) もっとも、ここで言う国際領域とは国際分業論まで射程の及ぶ包括的な国際領域という意味である。したがって、貨幣の両義性に基づく「集権化 centralisation と断片化 fractionnement」(Aglietta/Orlean [1982]) を国際領域へ移植し、「国際通貨の単一性」と「国民諸通貨の多様性」(Aglietta [1986b]) の観点から国際通貨レジームを精力的に検討した Aglietta は、(部分的には国際分業への言及を含んでいるが) その重要性にもかかわらず、この三系列から除いてある。国際通貨レジームについては、Aglietta [1984] [1987] [1991b] [2002] も参照。ちなみに後に述べるように、通貨の国家主権を克服して国際通貨の単一性へと向かう傾向そのものが同時に集権化傾向と断片化傾向を生み出すとする Aglietta の論理展開は、国民経済を出発点とする世界経済空間の形成が統合化と断片化を同時に生み出すという Mistral の論理展開の影響を与えていると思われる。なお、「レギュラシオン学派の貨幣認識と国際通貨・金融問題」に関しては、斉藤 [1992] の的確な紹介を参照。

本稿ではまず、この三系列のうち、国際レジーム概念に最初に言及したミストラルについて検討し、以下、順次、彼の後継者たちを「国際レジーム概念の彫琢と展開」として、そしてリビエツおよびオミナミの国際分業論を「国際レジームの歴史的分析」として取り上げていきたい。

レギュレーション学派において直接に国際レジーム概念に言及されるのは、タイトル名も「国際レジームと国民的諸軌道」(Mistral [1986b])と題されているようにミストラルにおいて最初となる。ただし、実質的には、それ以前の彼の著作においても展開されているものと内容的に重なる部分も大きいし、またより明瞭に語られている箇所もある。

そこで本稿は、まず第一章において、直接に国際レジーム概念に言及した上記論文を中心に彼の論理展開に則してパラフレーズし、必要な箇所では他の著作をも交えて、彼の国際レジーム概念の再構成を試みたい。というのも、ミストラルの論理展開は、含蓄が深いとはいえ、非常に込み入っており、また用語の使用法も、国内レベルにおいて語っているのか、国際レベルで語っているのか、判然としないところが多いからである¹⁰⁾。そしてそのため、ミストラルが国際領域に言及したことは、我が国においてもたびたびその重要性が指摘されながら、彼の国際レジーム概念については本格的に検討がなされていないからである。

そしてミストラルの国際レジーム論を再構築した後、本稿第二章においては、彼の国際レジーム概念が切り開いた地平を以下の二系列にわたって浮き彫りにしたい。

第一は、ミストラルがレギュレーション学派の基礎諸概念を国際領域に移植・適用したことである。そしてそのことによって彼は、レギュレーション学派の中心概念である「成長レジーム(蓄積レジーム)」¹¹⁾と「制度諸形態/レギュレーション様式」を、「国際分業地図」と「国際レギュレーション諸形態」として国際レベルへと置き換えるとともに、両者の適合関係として「国際レジーム」をとらえ、この国際レジームを「発展様式」と対応させたのである。

第二は、ミストラルとアメリカ国際レジーム学派の国際レジーム概念との交差および彼の包括性と歴史認識についての独自性である。アメリカ国際レジーム学派においては、国際レジーム概念は主として国際政治経済秩序の安定化をもたらす制度面において捉えられている¹²⁾。だ

10) Mistral に関しては、いま述べたように彼の論理展開が非常に込み入っている上に、特に初期に邦訳されたものは、筆者も含めて訳者たちに国際レジーム概念についての理解が希薄であったため、邦訳がある場合でも大幅に修正した。

11) かつては蓄積レジーム *regime d'accumulation* と表現されることが多かったが、今は成長レジーム *regime de croissance* と混在して使用されるか、むしろ後者が優先されることが多い。例えば、Boyer [2002a]。

12) いまやアメリカ国際レジーム学派の国際レジームの定義の標準になった Krasner [1983b] p. 1 によれば、「国際レジーム *international regimes* [複数形に注意] は、特定の問題領域で行為主体の期待がそこに収斂するような明示的または暗黙の原則・規範・ルール・意志決定の手続きである」。したがって後にも検討するように、アメリカ国際レジーム学派が国際制度をもっぱら重視していることは、明らかであろう。なお、別稿で検討する Vidal [2002] p. 172 の国際レギュレーションの定義は、

がミストラルは、国際レジーム概念を覇権国の成長レジームの国際的な不均等な波及による国際分業地図の形成とそれに適合的な国際レギュラシオン諸形態の二側面から把握しているため、国際レジーム概念が実態的側面と制度的側面との関連を考慮に入れたより包括的＝総合的な概念へ鋳直されている。さらに彼は、19Cの覇権国イギリスの成長レジームを外延的成長レジームとして捉え、20C第三四半期の覇権国アメリカの成長レジームを内包的成長レジームとして把握している。そのため、ミストラルの国際レジーム概念は、資本主義の質的变化を歴史的射程をもって視野に納めると共に、覇権の基礎となる覇権国の成長レジームやそれに適合的な制度的諸形態（覇権国の発展様式）をも国際レジームとの関連において捉えていくのである。

1. ミストラルの国際レジーム概念の再構成

レギュラシオン学派において国際レジーム概念を嚆矢として提起したミストラルの「国際レジームと国民的諸軌道」論文は、「1. 世界経済：歴史、経済、理論」「2. 諸国民経済と国際経済」「3. 国際レギュラシオン諸形態」「4. 国際レジームの移行」「5. 結論：袋小路か、進路変更か？」の五つの章から構成されている (Mistral [1986b])。

繰り返しになるが、彼の論理構成は非常に込み入っている。しかしながら、「1. 世界経済：歴史、経済、理論」において彼が本論文の見取り図を述べた箇所を参考にし、彼の論文全体を見渡しながら、それを敷衍すれば次のような論理的脈絡の整理が可能であろう。

まず、各国の経済空間は、各国に固有なレギュラシオン形態を備えているために、他の国民経済に対しては特殊性を有しており、この限り世界経済は、分離 separation, あるいは断片化 fractionnement に基づいている。しかし、国際レジームの第一の側面である覇権国の成長レジームの国際的に不均等な波及は、この過程に対する各国の適応能力の相違に応じて各国の差異化 differentiation を産み出しつつも、その差異化を許容可能な範囲に押さえる。それゆえ、この不均等な波及過程は、世界経済の統合化 integration¹³⁾ と新たな断片化を同時に生み出すことによって、国際分業地図を形成する。そして、この断片化された様々な国民的経済空間が、不確実性と紛争に陥らず、安定性を保つためには、国際レジームの第二の側面である国際レギュラシオン諸形態が必要となってくる。こうして国際分業地図と国際レギュラシオン諸形態の適合関係に基づく国際レジームとその歴史的変容過程が取り扱われるのである。

「出発点は、当然のことながら国民経済概念の考察である；次に我々は、[覇権国の] 成長

Krasner のこの定義をそのまま採用しており、一面ではアメリカ国際レジーム学派とレギュラシオン学派の交差も見られる。

13) 統合化は、彼の他の著作では (Mistral [1980] [1982a]), 統一化 unification, あるいは同質化 homogenisation とも表現されている。

レジームと [第一の側面としての] 国際レジームの組合せについて検討する；国際分業によって理解されていることを定義した後になると、我々は、特化が累積優位に基づいている場合の特化について取り扱うことができる。その後、国際レジームの第二の側面である [国際] レギュレーション諸形態が、まずミクロ経済レベルで、次いでマクロ経済レベルで分析される。それから、国際レジームの安定性とその変化の問題に取り組みられることができるようになり、そして現在の国際情勢に関するいくつかの広い範囲に及ぶ考察によって締めくくられるのである」(Mistral [1986b] p. 169, 176)¹⁴⁾。

以下、本稿もこの論理展開に則して、必要な場合には他の諸著作にも言及しながら、ミストラルの国際レジーム概念を再構築していく。

1.1 「諸国民経済と国際経済」の再構成

ミストラルは、世界経済空間が断片化と統合化の二側面を有していることを強調する。まず、分離、あるいは断片化は、国民国家の形成により国内市場が同質化したことから生じる。この同質化された空間は、各国の技術的・歴史的基礎の故に、他の諸国に対して特殊性 = 各国に固有なレギュレーション諸形態を有する。

ここで彼は、国民経済におけるレギュレーション諸形態を次のように述べる。「[国民的] レギュレーション諸形態は、各国空間内部で展開する技術変化に対する集団的態度、経済競争に関する調停、社会的コンフリクトの解決を具体化しているのである」(Mistral [1986b] p. 170 ; 177ページ)。そして各国ごとのこのレギュレーション諸形態の差異化から、世界経済空間の断片化が生じるのである。

では、このように断片化された世界経済空間は、どのようにして統合化されるのであろうか？ミストラルによれば、市場かつ/あるいは多国籍企業や多国籍銀行は、この差異化を利用するのであって、通常、理論レベルで考えられているように、統合化を生み出すことはできないのである。ここで彼は、第一の側面としての国際レジーム概念と覇権国の成長レジーム概念を導入する。

「我々は、[第一の側面としての] 国際レジームを強固に築かれ、[各国の] 資本蓄積の進展を保障する相互補完関係の存在に基礎づけられた経済諸空間の構図、およびそれらの空間の相互連関の構図として定義しよう」(Mistral [1986b] p. 172 ; 179ページ)。

そして、この構図を創り上げていく推進力が、覇権国の成長レジームなのであり、「19世紀

14) [] 内は、筆者挿入。以下、同様。このように対象となる用語を形容する言葉がその都度、適切に与えられていないことが、彼の論理展開を解きほぐすことを一層困難にしている。

後半の主として外延的成長レジームと20世紀第半四半期の主として内包的成長レジーム」(Mistral [1986b] p. 176 ; 183ページ) がそれに当たるとして、アグリエッタの「外延基調の蓄積レジーム」から「内包基調の蓄積レジーム」への歴史的移行というテーゼを援用する。(Aglietta [1976])。

ミストラルは、イギリスの覇権と外延基調の蓄積レジームの結びつきに関してはエピソード以上のものを語っていないが、アメリカの覇権については他論文で、その移行と特徴について次のように述べている。

まず、アメリカの覇権の確立に関して言えば、それは三つの時期にわたる長い歴史をもつ。第一期は、巨大な市場と例外的に柔軟性のある社会諸関係に支えられて工業化の基礎を築き、保護主義に守られながらイギリスにキャッチ・アップした時期である。第二期は、生産諸条件と生活諸条件の絶えざる変革に根を下ろして、20世紀初めに新しい成長様式を開始した時期でもあり、また第一次大戦で弱体化したヨーロッパ諸列強に対して位置取り戦争をリードした時期である。第三の時期は、第二次大戦後にアメリカが政治面・軍事面のみならず工業面・金融面での優位を確立した時期である (Mistral [1980] p. 5)。

そして、新しい成長レジームの世界的規模での確立をもたらしたアメリカの覇権の特徴に関して、四本の支柱に支えられていることを指摘する。二本は国内的支柱であり、製品と生産方法に関する技術面でのリード、および高度成長のレギュラシオンに適合的な制度的枠組みの中への社会諸関係の組み込みである。もう二本は対外的支柱であり、ドルの国際的購買力の実質的な過大評価、およびアメリカのパワーの世界的な拡張をもたらすのに適した国際組織の整備がそれに当たる (Mistral [1980] p. 5, [1982a] p. 214 ; 33ページ)。

この構造的条件に支えられて、一方では、アメリカで経験された生産および消費規範が、既に工業化した諸国 (EEC と日本) の古いレギュラシオン諸形態を覆しながら、それゆえラポール・サラリアルルの深化を通じて、より効率的な生産規範やレギュラシオン諸手続の波及させていく。だがこの過程は、覇権国の生産・消費規範に対する適応能力の国民的相違によって各国のマクロ経済的分岐を孕みながら、それゆえ新たな断片化を生み出しながら、不均等に波及していく。また他方ドルの過大評価は、アメリカの巨大企業の活動の世界的展開を促進する。そして、この二つのプロセスによって、異なった経済諸空間の相互補完関係と相互連関が可能となり、アメリカで経験された成長レジームが波及した地域に貿易と投資の集中が生じるのである。それに対して、覇権国企業の貿易面と金融面での周辺国への拡張は、周辺国の伝統的な社会構造を破壊し、その社会構造の変容を持ち込まれた周辺国を外向的推進力に服従させ、周辺国の混沌とした社会の移行を開始させるのである。したがってここでは、後に「戦略圏」で述べるような排除の論理が働き、第三世界における発展の周辺の性格が加速するのである (Mistral [1980] pp. 4 6)。

「かくして [第一の側面としての] 国際レジームは, [先進諸国の] 各国経済空間を接合する支配的原理として作用するのであり, 各国経済の参入様式は, その原理に組み込まれているのである。……この論理は, まさに古い工業諸国に対しては統合的な作用を果たすのである」(Mistral [1986b] p. 174 ; 181ページ)。

ここで我々は, ミストラルが個々ばらばらに指摘している第一の側面としての国際レジーム概念を, 以下の三要素からなるものと考えることができる。第一は, 覇権国の成長レジームであり, その成長力を国際的に不均等に波及させていく力を持つ。第二は, この成長力の国際的波及によって形成された各国の新たな断片化とその相互補完関係に基づく各国の国内的な経済構造, あるいは各国の成長レジームである。したがって後にも述べるように, ミストラルは第一の側面としての国際レジームが各国内の成長レジームに影響を与えている面も考慮に入れているのである。したがって国際レジームは, 覇権国アメリカの成長レジームより幅広い概念であり, 各国の断片化に基づく相互補完として国際分業形成の基礎を説明するものなのである。第三は, このようにして形成された各国の成長レジームの国際フロー(貿易, 直接投資, 金融)による相互連関を媒介として形成される国際分業が該当するのである。

次にミストラルは, 貿易による競争を通じた覇権国の成長レジームの不均等な波及過程 = 各国の適合過程をさらに深く理解するために, 「国際分業地図」概念と「戦略圏」概念を導入する。そのための手始めとして, ミストラルは各国のとしての貿易の両義的役割を確認する。

「貿易は, 一連の好機(市場拡大, より安価な物資, 相互補完的な資金調達源……)を提供すると同時に, 一連の制約(マクロ経済的国内レギュレーションに対する, 通貨管理に対する, 技術獲得に対する……)を課すのである」(Mistral [1986b] p. 175 ; 182ページ)。

したがって, 覇権国のもたらす成長レジームの波及に参入するためには, 各国経済は, その内部に覇権国の成長レジームの波及に適合的な国民的レギュレーション諸形態を生み出さねばならない。あるいは, 各国の資本蓄積の動態に, この適合への潜在能力がなければならぬ。この適合能力には, 各国間でヒエラルキーがあり, このヒエラルキーに重点を置いて国際分業の構図を描いたものが, 「国際分業地図」概念である。そして国民的レギュレーション諸形態と各国の適合能力に焦点を当て, 第一の側面としての国際レジームへの参入の論理と排除の論理を述べたものが「戦略圏」概念として示される。

「我々は, 国際分業地図 *carte de la division internationale du travail* を, 技術的および会的な標高差 [格差] *denivellation* に関わる原理として定義しよう。その原理は, 各国

経済空間における生産と利用の諸条件の質的变化を通じて、[覇権国の] 成長レジームへの潜在的参入能力を説明するのである。国際分業地図は第一に、技術的および社会的イノベーションが集中している特定の国民経済（あるいは特定の複数の国民経済）の位置を確定するヒエラルキー図に従って描かれる。国際分業地図は、この中心地（あるいは複数の中心地）を起点として、そこに集中した世界的規模での生産物や資本の流通経路を描いており、その経路は戦略圏の存在を明らかにしているのである。

戦略圏 *aire strategique* の概念が築き上げるのは、一方では支配的経済国が世界経済全体に提供する潜在的成長能力と同国が課す制約との間の関連であり、他方では各空間における資本蓄積の独自の動態なのである」(Mistral [1986b] p. 176 ; 183 4 ページ)。

ここで少し戦略圏概念について敷衍しよう。新技術の導入は、元来の組織原理のレギュラシオンの国民的諸形態を一新する。そしてそのことが各国経済の資本形成を促進する場合には、各国経済の支配的経済に対する格差は副次的なものであり、各国経済の国際分業への組み込みは「参入 *adhesion* の論理」(Mistral [1986b] p. 177 ; 184 ページ) に従って行われる。この場合には、戦略圏は、各国の経済構成体による差異化を許容可能な範囲に抑制するのである。それとは反対に、先のインパクトが社会階層や経済的ネットワークの伝統的な構図と衝突し、「全体としてのレギュラシオンの国民的諸形態 *formes nationales de la regulation d'ensemble*」と不適合を起こすなら、これら経済空間の国際分業への組み込みは、「排除 *eviction* の論理」(Mistral [1986b] p. 178 ; 186 ページ) に従うことになるのである。こうして、国内的諸変化が国際規範の要請に適合するなら、第一の側面としての国際レジームは、戦略圏の拡大に結びつくのである。

そしてミストラルは、「諸国民経済、国際経済」と題された節を締めくくるに当たって、各国の国際レベルでの覇権国の成長レジームへの参入能力を際立たせるために、国民経済に力点を移す。そして彼は、各国の累積優位 *avantage cumulatif* (Mistral [1986b] pp. 179-80 ; 187 ページ) に基づいた競争力という概念を提示していくのである。というのも、比較優位や特化が静態的に所与の時点における資源の再配分を取り扱うのに対して、競争力概念は、国際市場で伝達される規範への各国のレギュラシオン諸形態の変化 = 適応能力を示すからである。この領域においては「すぐ使える状態における覇権国の成長レジームの移植はない以上」(Mistral [1986b] p. 180 ; 187 ページ)、技術面での地位の更新と収益性の上昇を可能にするようなレギュラシオンの国民的諸形態の国際規範への適応が必要なのである。

このような適応の成功を貿易面から見れば、輸出においては世界需要の成長が著しい部門への参入である。また輸入においては、技術的支配が必要な製品の国内市場の征服である。この征服は、国内の様々な部門における分業の深化を保障するからである。こうして「国際分業は、累積優位に基づいた時間をまたぐ論理を呼び起こすのである」(Mistral [1986] p. 180 ; 187

8 ページ)^{15) 16)}。

1.2 「国際レギュレーション諸形態」の再構成

以上で国際分業の原動力を明にした後、ミストラルは国際レジームの第二の側面の考察に入る。

「このように国際分業の原動力を研究したことによつては、世界経済の統合は、その諸側面の一つだけが明らかにされたに過ぎない」(Mistral [1986] p. 180 ; 188ページ)。

しかしながら、世界経済空間に断片化の傾向がある以上、各国が貿易戦争や通貨戦争に陥らないための制度的枠組みがなければならない。彼は、それを「国際レギュレーション諸形態 formes de la regulation internationale (Mistral [1986] p. 180 ; 188ページ)」、あるいは国際「構造諸形態 formes structurelles」(Mistral [1986] p. 181 ; 188ページ)として展開する。

「国際レギュレーション諸形態が示すのは、まさに民間主体の行動を方向づけ、国家介入の行為を制約する規範 normes・規則 regles・制約 contraintes・制度 institutions の総体なのであり、この総体が民間主体の行動を方向付け、諸国家間の競争的対立と敵対を緩和するのである。この観点から、構造諸形態の三大カテゴリーが、注意深く分析され、階層的に分類されねばならない」(Mistral [1986] p. 181 ; 188ページ)。

15) なお Mistral がここでアメリカの成長レジーム波及への各国の適応過程における輸出入の役割と累積優位を強調するのは、高度成長を遂げたとはいえ、フランスのフォーディズムの「構造的脆弱性」に一貫した危機感を持っていることの表れでもある。それは、海外の設備財のフランス国内市場への浸透を許しているため、他の諸部門の生産諸条件の変革を海外に依存していることである。したがって、そのことは、一方では国内での緊密な産業網の欠如や輸出競争力の弱さにつながり、他方では生産諸条件の変革と結びついた国民の生活諸条件の同時的変革の海外への依存を意味するからである。Mistral が「選択的政策 politique selective」による設備財部門を軸とした「国内市場の支配 maîtrise du marche interieur」あるいは「国内市場の再征服 reconquête du marche interieur」を彼の諸著作に流れる通奏低音として強調するのは、他部門への波及効果を持つ動的な累積優位の確立が保護主義を避けつつ対外制約を緩和する重要な手段と見なしているからである (Mistral [1978] [1982a] [1982b] [1983] [1986a])。

16) 奥村 [1986] [1987] [1988] は、Ministere de l'economie, des finances et du budget [1973] に基づく国内生産統計と Ministere de l'economie, des finances et du budget [1983] の外国貿易統計を結びつけ、あわせて各部門と貿易相手国をクロスさせ、フランスの部門別・貿易相手国別の輸入浸透度 = $Mik / (Pi + Mi - Xi)$ 、輸出依存度 = Xik / Pi を計測し、主に1970年代のフランスの設備財部門における日米(西)独による輸入浸透度の高さを実証している。なお Mik : i 商品の k 国からの輸入額、 Xik : i 商品の対 k 国輸出額、 Pi : i 商品の国内生産額。

この構造諸形態の第一の総体は、商品と資本フローの流通を調節する *regler* 国際ネットワーク *reseaux internationaux* (海外営業支店・輸送網・銀行の海外進出) である (Mistral [1986b] p. 181 ; 189ページ)。このネットワークは、各国経済空間を物的に相互に関連させるインフラストラクチャーを構成し、その機能は市場を拡大し、不確実性とコストを低下させることである。しかしながら、この相互関連は、生産の領域に直接には浸透しない表面的な性格を持つに過ぎないのである。

構造諸形態の第二の総体は、国際化した企業 *firmes internationalisees* の空間的な展開の様態にかかわってくる (Mistral [1986b] p. 182 ; 189ページ)。国際化した企業 [多国先企業] は、各国空間における市場の成長予測、相対価格の構造、賃労働関係 (ラポール・サラリアル) の諸特性、政府の優遇措置や制約を、企業計画の中に統合していく。つまり国際化した企業は、「国際分業地図を私的計算の領域に投げ入れるオペレーター」なのである。したがって国際化した企業は、ミクロ経済モデルに応じて、生産の地域的編成を行っていくのである。

しかしながら超国籍化した企業といえども、企業は一方では、寡占間競争がもたらす制約に服している。また他方では、企業行動は、国家の通商政策、資本移動に対する態度、各国ごとの価格体系の非均質性、為替レートといった各国空間の差異化が課す諸力に規定され続けている。したがって、企業活動のミクロ経済的規定要因は、差異化を生む出す国民的諸要因に服属しているのである。では、国民経済の差異化とヒエラルキーを孕んだ国際分業地図の安定化を維持するものは、何であろうか？

それゆえ、構造諸要因の第三の総体は、貿易面と国際通貨制度面からなる国家による「国際経済諸関係の制度化 *institutionalisation des relations economiques internationales*」 (Mistral [1986b] p. 185 ; 193ページ) である。この国際経済諸関係の制度化は、世界国家が存在しない以上、覇権国主導で行われるか、関係諸国の交渉による。だがミストラルは、この国際経済諸関係の制度化が良好に構造化された時期として、覇権国の存在の重要性を指摘する。そして彼は、国民的自立性の余地と対外制約の性格に歴史的相違があるという視点から、「19C 末と20世紀半ばに確立された [第二の側面としての] 国際レジームの比較」 (Mistral [1986] p. 185 ; 192ページ) としてイギリスの覇権期とアメリカの覇権期を対比する。

19C の自由貿易と金本位制は、国際経済諸関係の制度化を市場に服属させるものであった。それに対して、「埋め込まれた自由主義 *liberalisme insere* という概念が、20世紀半ばには貿易面でも通貨面でも優勢になるのである」 (Mistral [1986b] p. 185 ; 193ページ)¹⁷⁾。

17) Mistral が引用している「埋め込まれた自由主義 *embedded liberalism*」概念は、市場経済と社会との関連を問うた Polanyi [1957] の立論を踏襲した Ruggie [1983] によっている。Ruggie は、戦後の IMF・GATT 体制を単に市場メカニズムに服属した国際秩序としてではなく、国内均衡と国際均衡の同時達成を目指したものとして分析しているのである。なお、Ruggie の「埋め込まれた自由主義」概念については、鳴瀬 [2001]、八木 [2007] を参照。

GATT 諸協定は、交渉、妥協、制裁に基づいた政治的論理に依拠しており、この政治的論理は、多くの例外を認め、実質的な駆け引きの余地を残しているからである。それゆえ GATT は、国民的差異化を認めることに基づいた関税障壁低下へ向けての多角的プロセスなのである¹⁸⁾。

ブレトンウッズの国際決済システムも、その持続性を、国際収支の赤字のファイナンスの IMF の原資への条件付きアクセス、および構造的不均衡の場合の平価変更を持っているのである。それゆえ、国際収支の調節は、市場の自動機構の結果と言うよりも、IMF との交渉過程から生じるのである。したがって、この時期の国際決済システムは、各国のマクロ経済的レギュレーションと密接に結び着いた信用貨幣の発展に基づく通貨システムの論理に属しているのである。

以上のような展開の後、ミストラルは、「対外制約と積極的調節」と題された節で、今まで手順を踏みつつも、切り離されて述べてきた二大研究対象である国際分業地図と国際レギュレーション諸形態を振り返り、国際レジームがこの両者から形成されていることを述べる。つまりこの箇所に至って、はじめて国際レジームの定義が、ミストラルによって与えられるのである。そのうえで、彼は国民経済に対して作用する対外制約への適応過程を積極的調節として示し、この過程を国際レジーム内の小危機ととらえ、レギュレーション学派の危機概念の国際領域への移植を示唆するのである。

少し長くなるがまず、ミストラルの国際レジーム概念の理解について総合的に述べられた箇所であるので、そのまま引用しよう。

「理論的考察の展開が最終的に我々に可能にしたのは、二つのタイプの研究対象を結びつけることであった。[1] 第一のものは、複数の国にまたがる空間における蓄積の動態に関連している。この第一のものによって可能になったのは、国際分業地図を累積優位の論理に基づく過程として描くことである。そこから生ずるのは、支配的成長レジームへの参入能力に応じて、各国空間が分極化する傾向である。[2] 他方、各国空間の相互関連は、[a] 組織的論理に従ってミクロ経済的次元で作動したり、[b] あるいは制度的論理に従ってマクロ経済次元で作動したりする構造諸形態の総体によって保証されている。この構造諸形態が相互依存の様態を規定しているのである。[3] 今や、この二つへの準拠を結びつけることによ

18) 佐伯 [1990] 序章によれば、GATT は関税・貿易という対外政策については共通の規制が課せられているが、国内政策に関しては各国の主権が尊重されているため「国境主義」と特徴付けられる。それに対して WTO (ウルグアイ・ラウンドにむかう GATT の流れ) は、農業・知的所有権・サービス貿易等を交渉の対象とするので、国内政策や国内制度にまで影響が及ぶため「国内主義」と言われる。このことは、先に述べた諸制度の階層性に変化が生じ、国際レジームへの各国の参入がヒエラルキーの頂点に立ったことと密接に関わっているのである。

って我々にとって可能となるのは、国際経済に関する安定性と変化も問題に取り組むことである。事実、この段階で我々が示すことができるのは、国際レジームの安定性は、国際分業地図と [国際] レギュレーション諸形態の適合 *conformite* に基づいているということである。したがって考察は、同時に行われなければならないのである」(Mistral [1986b] pp. 186 7; 195ページ)。

この [1] の箇所は、我々が「諸国民経済、国際経済」でパラフレーズしたところである。また [2] の箇所の [a] [b] は、我々が、「国際レギュレーション諸形態」において構造的諸形態の三大カテゴリーとして解説したものである。そして [3] において、両者の総合としての国際レジーム概念が、ミストラルによって初めて示されるのである。

次にミストラルは、対外制約と国際レギュレーション諸形態の関係について述べていくなかで、積極的調節の果たす役割を指摘する。国際レギュレーション諸形態は、各国のマクロ経済的差異化を許容可能な多様性 *varietes* の範囲にとどめるものとして作用する。そして、このような各国の国内動態に対する世界市場のフィードバックが、対外制約 *contrainte exterieure* (Mistral [1986b] p. 188; 196ページ) とよばれるのである。したがって対外制約が示しているのは、国民経済において追求される発展様式と国際レベルで課される諸規範との不一致であり、それは各国の競争力の危機 (小危機) として現れる。この競争力の危機の解決に向けて各国は、国民的レギュレーション諸形態の配置そのものやその作用のあり方を覇権国の成長レジームへ参入できるよう適合させていく。この場合には、各国の戦略圏は広がり、この適合過程は、積極的調節 *ajustement positif* (Mistral [1986b] p. 189; 197ページ) としての意味を持つのである。またこの過程そのものは、各国が分岐する諸傾向を吸収しつつも、国際的な諸規範への各国の適応能力に応じて、統一化と新たな断片化を同時に生み出していくのである。

1.3 「国際レジームの移行」と「結論：袋小路か、進路変更か？」の再構成

この二つの章では、イギリスの覇権期 [パクス・ブリタニカ] とアメリカの覇権期 [パクス・アメリカーナ] の国際市場の運行の比較が試みられ、1970年代以降のアメリカの覇権の衰退がノン・レジームをもたらしたことが指摘されている。

まず、ミストラルは「国際レジームの移行」と題する節において、国際レジームが堅固に確立される四条件を指摘する。それは第一に、覇権国が、技術面でのリードを保ち、新しい欲求様式を開発し、労働編成や情報流通において効果的形態を有することである。第二は、諸国民経済の経済成長が構造的な国際収支の赤字や黒字を生み出さないように、国際レギュレーション諸形態の中に制約として働く調節原理を組み込むことである。第三は、国際資本移動が国際レジームへの参入に貢献することである。第四は、国際通貨組織が、通貨不足や過剰流動性を生まないことである。

この四条件が満たされたのは、イギリスとアメリカの覇権下にある時期である。そして両者の違いを彼は、次のように要約する。イギリスの覇権下の国際レジームは、「諸々の国際市場の自動機構」に基づいていたのに対し、アメリカの覇権下の国際レジームは、諸々の国際市場を、「各国のレギュレーションの隙間に組み入れているのである」 (Mistral [1986b] p. 193 ; 200ページ)。

そしてミストラルは、「結論：袋小路か、進路変更か？」において、もう一度、国際レジーム概念の展開過程を振り返り、あわせてレギュレーション学派的危機概念の国際領域への適用を試みる。

「本研究がまず可能にしたのは、世界市場の形成過程、および生産と消費様式の国際化という動向を [覇権国の] 成長レジームの普及過程として把握することである。とりわけこの分析が強調するに至ったことは、国際レギュレーション諸形態の重要性であり、この諸形態は、いつも潜んでいる国際経済の断片化への傾向を阻止するのである」 (Mistral [1986b] p. 197 ; 205ページ)。

そしてこの文脈の中で彼は、「安定的発展様式内部でのレギュレーションの構成要素である循環性危機」と「発展様式総体の危機」を区別したボワイエの危機概念 (Boyer [1987] pp. 60 79 ; 96 114ページ。Annexe II, p. 136) を国際分野へと移植する。そして彼は、それを「競争力の危機」と国際「レジームの危機」の二つのタイプの危機としてとらえ直していくのである。

「最初のもは、競争力の危機 [小危機] crises de competitivite と呼ばれるもので、しばしば不調和を伴ってはいるが、国際的規模で有効な規範への各国経済の同調 *alignement* を示している。そのために、競争力の危機は、統合的な性格を有するのである。[国際] レジームの危機 crises de regime は、全く異なる性格を持っている。なぜなら、この危機は、イギリスのリーダーシップと合衆国のリーダーシップの間の移行の場合がそうであったように、国際的なゲームのルールの本格的な再調整 *reamenagement* を問題にしているからである」 (Mistral [1986b] p. 197 ; 205ページ)。

そしてミストラルは「結論：袋小路か、進路変更か？」において、1970年代以降のアメリカの覇権の衰退が、「国際 ノン・レジーム *non-regime international*」 (Mistral [1986b] p. 197 ; 205ページ) を生み出し、このノン・レジームには二つの傾向が交錯していることを指摘する。

第一の傾向は、国際レギュレーション諸形態の変化である。それは、アメリカと他の先進諸国

との間に力関係の変化が生じたためであり、また石油危機と結びついた新たなファインスの必要が生まれたからである¹⁹⁾。

そして第二の傾向は、国際分業地図の変化である。旧い工業諸国の第三次産業革命と結びついたイノベーションと新興工業諸国の資本形成と貿易促進の必要性が、それに当たる。そしてこの国際分業地図に適合するよう、行為主体を方向づけ、行為主体の予測を安定化させる同質的で持続的な国際活動のルール形成の必要性が指摘される。しかし、70年代以降は覇権に基づいた国際関係が存在しないので、国際的編成形態が袋小路に陥らないためには、国際活動のルール形成が各国の交渉によって練り上げられる必要性の中に20C末を支配する大きな進路変更があるとして、本書が締めくくられるのである。

以上、我々はミストラルの論理展開に沿う形で、彼の国際レジーム概念を再構成してきた。彼の国際レジーム概念は、国際分業地図と国際レギュラシオン諸形態の二側面から、あるいは両者の適合からなっていた。そして国際レジームを形成するのは、覇権国の成長レジームの国際的に不均等な波及であった。そして、この波及過程は一方では、国際レギュラシオン諸形態に支えられて、各国の生産諸条件や消費諸条件の国際規範への適合 = 世界経済空間の統一化をもたらすものとして把握されていた。また他方でこの波及過程は同時に、各国の国際規範への適応能力に応じて国民的諸軌道の分岐 = 断片化 (より正確には再断片化) をもたらす過程として捉えられた。こうしてミストラルの国際レジーム概念は、世界経済空間の「統合化と断片化の弁証法 dialectique: integration et fractionnement」(Mistral [1986b] p. 171 ; 178ページ) を捉える理論装置として提起されたのである。

それを踏まえて、次稿で我々はミストラルの国際レジーム概念の特徴とそのことによって切り開かれた二つの地平であるレギュラシオン学派の基礎概念の国際領域への移植およびアメリカ国際レジーム学派との交差とその超克の可能性について検討したい。

参考文献

- Aglietta, M. [1976] *Regulation et crises du capitalisme : l'expérience des Etats-Unis* ; [1986a] 2^e ed. Calmann-Levy ; [1997] Nouvelle édition revue et corrigée, Odile Jacob (若森章孝 / 山田鋭夫 / 太田一廣 / 海老塚明訳 [1989] [2000] 『資本主義のレギュラシオン理論：政治経済学の革新』大村書店)
- [1984] ‘Les regimes monetaires de crise’ *Critique de de l'economie politique*, vol. 26/27
- [1986b] *La fin des devises cles*, La Decouverte (斉藤日出治訳 [1992] 『通貨統合の

19) Madeuf/Michlet/Ominami [1984], Ominami [1986] ch. 3 は、産油国のオイルマネーの多国籍銀行を媒介とした還流メカニズムを「私的レギュラシオン」として特徴付けている。

賭：第 部，藤原書店)

- [1987] ‘L’integration monetaire et financieres internationale : un defi pour l’Europe’ *Revue française d’économie*, vol. II, 3 (齊藤日出治訳 [1992] 『通貨統合の賭』第 部，藤原書店)
- [1991a] ‘Regimes monetaires, monnaie supranationale, monnaie commune’ in Lebegue/Boissieu [1991] (齊藤日出治訳 [1992] 『通貨統合の賭』第 部，藤原書店)
- [1991b] ‘Stabilite dynamique et transformation des regimes monetaires internationaux’ in Boyer/Chavance/Godard
- [1998] ‘Le capitalisme de demain’ *Notes de fondation de Saint-Simon*, n° 101
- [1999] ‘Les transformation du capitalisme contemporain’ in Chvance et al.
- [2002] ‘Le systeme monetaire international’ in Boyer/Saillard
- Aglietta, M./Brender, A. [1986] *Les metamorphoses de la societe salariale : La France en projet*, Calmann-levy (齊藤日出治ほか訳 [1990] 『勤労者社会の転換：フォードイズムから勤労者民主制へ』日本評論社)
- Aglietta, M./Orlean, A. [1982] *La violence de la monnaie*, PUF (井上泰夫/齊藤日出治訳 [1991] 『貨幣の暴力：金融危機のレギュレーション・アプローチ』法政大学出版社)
- Amable, B. [2003] *The diversity of modern capitalism*, Oxford University Press (山田鋭夫/原田祐治ほか訳 [2005] 『五つの資本主義：グローバリズム時代における社会経済システムの多様性』藤原書店)
- Andre, C./Delorme, R. [1983] *L’Etat et l’économie*, Seuil
- Beaud, M. [1987] *Le systeme national/mondial hierarchise : une nouvelle lecture du capitalisme mondial*, La Decouverte
- Bertand, H. [1985] ‘France : modernisation et pietinements’ in Boyer [1986b]
- Bertand, H./Mazier, J./Picaud, Y./Podevin, G. [1981] ‘Les deux crises des annees 1930 et des anees 1970 : une analyse en sections productives dans le cas de L’économie française’ *Revue économique*, Vol. 33, No. 2
- Billaudot, B. [2001] *Regulation et croissance : une macroeconomie historique et institutionnelle*, Harmattan
- Bourguinat, H. [1982] *Internationalisation et atonomie de decision*, Economica
- Bowles, S./Gordon, D. M./Weisskopf, T. E. [1983] *Beyond the waste lande : A democratic alternative to economic decline*, Anchor Press (都留康/磯谷明德訳 [1986] 『アメリカ衰退の経済学：スタグフレーションの解剖と克服』東洋経済新報社)
- Boyer, R. [1979] ‘la crise actuelle : une mise en perspective historique’ *Critique de l’économie politique*, vol. 7/8

- [1986a] *La theorie de la regulation: une analyse critique*, La Decouverte (山田鋭夫訳 [1988] 『レギュラシオン理論: 危機に挑む経済学』 新評論)
- [1986b] *Capitalismes fin de siecle*, PUF (山田鋭夫ほか訳 [1988] 『世紀末資本主義』 日本評論社)
- (sous la dir. de) [1986c] *La flexibilit  du travail en Europe: Une etude comparative des transformationns du rapport salaral dans sept pays de 1973 a 1985*, La Decouverte (井上泰夫抄訳 『第二の大転換 EC 統合化のヨーロッパ経済』 藤原書店)
- [1990] ‘The Capital Labor Relations in OECD Countries: From the Fordist “Golden Age” to Contrasted National Trajectories’ *CEPREMAP*, No. 9020 (ボワイエ/山田編 [1993] 所収)
- [2000] ‘Is a finance-led growth regime a viable alternative to Fordism? A preliminary analysis’ *Economy and Society*, vol. 29, no. 1
- [2002a] ‘Avant-propos a la seconde edition’ in Boyer/Saillard
- [2002b] ‘Du fordisme canonique a une variete de modes de developpement’ in Boyer/Saillard
- [2004] *Une theorie du capitalisme est-elle possible?* Odile Jacob (山田鋭夫訳 [2005] 『資本主義 Vs 資本主義: 制度・変容・多様性』 藤原書店)
- Boyer, R./Chavance, C./Godard, O. (sous la direction de) [1991] *Les figures de l’irreversibilite en economie*, Ed de l’Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales
- Boyer, R./Mistral, J. [1978] *Accumulation, inflation, crises*, PUF
- Boyer, R./Saillard, Y. (sous la direction de) [2002] *Theorie de la regulation: l’etat des savoirs*, La Decouverte
- Boyer, R./Souyri, P. F. eds [2001] *Mondialisation et regulations: Europe et Japon face a la singularite americaine*, La Decouverte (山田鋭夫/渡辺純子訳 [2002] 『脱グローバリズム宣言: パクス・アメリカーナを超えて』 藤原書店)
- Braudel, F. [1979] *Civilisation materielle, economie et capitalime, tome 3, Le tempes du monde*, Armond Colin (村上光彦訳 [1996] 『世界時間 1』, [1999] 『世界時間 2』 みすず書房)
- Chvance, B. et al. (sous la direction de) [1999] *Capitalisme et socialisme en perspective: evolution et transformation des systemes economiques*, La Decouverte
- Chvagneux, C. [2004] *Economie politique internationale*, La Decouverte
- Delapierre, M./Michalet, C. A. [1976] *Les implantations etrangeres en France: Strategies et structures*, Calmann-Levy (野口祐監訳 『多国籍企業の子会社』 慶應通信)
- Delorme, A. [1984] ‘Compromis institutionalise, etat insere et crise de l’etat insere’

- Critique de l'economie politique*, vol. 26/27
- Dicken, P. [1998] *Global shift: transforming the world economy, third edition*, Sage Publications (宮町良宏監訳 / 今尾雅博 / 鹿嶋洋 / 富樫幸一訳 [2001] 『グローバル・シフト: 変容する世界経済地図』古今書院)
- Dunning, J. H. [1981] *International production and the Multinational enterprise*, George Allen & Unwin
- Eichengreen, B. [2007] *Global imbalances and the lessons of Bretton Woods*, MIT Press (畑瀬真理子 / 松林洋一訳 [2010] 『グローバルインバランス: 歴史からの教訓』東洋経済新報社)
- Esping-Andersen, O. [1990] *The three worlds of welfare capitalism*, Polity Press (岡沢憲英 / 宮本太郎監訳 [2001] 『福祉資本主義の三つの世界: 比較福祉国家の理論と動態』ミネルヴァ書房)
- Fourquet, F. [2004] 'Le rapport international est toujours dominant' *L'annee de la regulation*, vol. 8
- Gallagher, J./Robinson, R. [1953] 'The imperialism of free trade' *Economic history review*, 2nd ser., vol. VI, no. 1
- Gilpin, R. [1981] *War and change in world politics*, Cambridge University Press
 — [1987] *The political economy of international relations*, Princeton University Press (佐藤誠三郎 / 竹内透監訳, 大蔵省世界システム研究会訳 [1990] 『世界システムの政治経済学』東洋経済新報社)
- Hymer, S. H. [1976] *The international operations of national firms: A study of direct foreign investment*, MIT Press (宮崎義一編訳 [1979] 『多国籍企業論』岩波書店)
- Kebabdian, G. [1998b] 'La theorie de la regulation face a la problematique des regimes internationaux' *L'annee de la regulation*, vol. 2
- Keohane, R. O. [1984] *After hegemony: cooperation and discord in the world political economy*, Princeton University Press (石黒馨 / 小林誠訳 [1998] 『覇権後の国際政治経済学』晃洋書房)
- Kindleberger, C. P. [1973] *The World in Depression 1929 1939*, University of California Press (石崎昭彦・木村一郎訳 [1982] 『大不況下の世界 1929 1939』東京大学出版会)
- Krasner, S. D. ed. [1983a] *International regimes*, Cornell University Press
 — [1983b] 'Structural causes and regime consequences: regime as intervening variables' in Krasner [1983a]
 — [1983c] 'Regimes and the limits of realism: regimes as autonomous variables' in Krasner. [1983a]

- Lebegue, D./Boissieu, D. [1991] *Monnaie unique europeenne, systeme moetaire international: vers quelles ambition?* P. U. F.
- Lipietz, A. [1985] *Mirages et miracles: problemes de l'industrialisation dans le tiers monde*, La Decouverte (若森章孝 / 井上泰夫訳 [1987] 『奇跡と幻影: 世界的危機とNICS』新評論)
- [1986a] 'Le kaleidoscop des {sud}' in Boyer [1986a]
- [1986b] 'New tendencies in the international division of labor: regimes of production and modes of regulation' in Scott, A. J./Storper, M. eds. (ボワイエ / 山田編 [1997] 所収)
- Madeuf, B./Ominami, C. [1983] 'Crise et investissement international' *Revue economique*, Vol. 34
- Madeuf, B./Michlet, C. A./Ominami, C. [1984] 'D'une crise internationale a une crise mondiale' *Critique de l'economie politique*, vol. 26/27 (ボワイエ / 山田編 [1997] 所収)
- Mazier, J./Basle, M./Vidal, J. F. [1993a] *Quand les crises durent...*, Economica
- [1993b] 'Formation des salaries et norms de consommation' in Mazier/Basle/Vidal [1993a] (ボワイエ / 山田編 [1996] 所収)
- Michalet, C. A. [1985] *Le capitalisme monedial, deuxieme edition entieremnt refondue*, PUF (藤本光夫訳 [1982] 『世界資本主義と多国籍企業』世界書院)
- Ministere de l'economie, des finances et du budget [1973] *Nomenclatures d'activites et de produits (NAP)*, Journal officiel de La Republique Française
- Ministere de l'economie, des finances et du budget [1983] *Statistiques du commerce exterieur*
- Mistral, J. [1978] 'Competitivite et formation de capital en longue periode' *Economie et Statistique*, vol. 102
- [1980] 'Division Internationale du Travail: quelle crise?' *Revue d'economie industrielle*, vol. 14
- [1982a] 'La diffusion international de l'accumulation intensive et sa crise' in Reiffers (ボワイエ / 山田編 [1997] 所収)
- [1982b] 'Maîtrise du marche interieur, competitivite et redeploiement' in Bourguinat
- [1983] 'Les dependances de la France en matiere de biens d'equipement' *Revue d'economie industrielle*, vol. 23
- [1986a] '125 ans de contraintes exterieure et l'experience française' *Economie et*

- Societe*, vol. 20
- [1986b] ‘Regime international et trajectoires nationales’ in Boyer [1986b]
- OECD [1979] *The impact of the newly industrialising countries on production and trade in manufactures* (大和田眞朗訳 [1980] 『OECD レポート：新興工業諸国の挑戦』東洋経済新報社)
- [2001] *OECD historical statistics 1970 2000*
- Oman, C. [1984] *New forms of international investment in developing countries*, OECD
- Ominami, C. [1986] *Le tiers monde dans la crise: essai sur les transformations recentes des rapports nord-sud*, La Decouverte (奥村和久訳 [1991] 『第三世界のレギュラシオン理論：世界経済と南北問題』大村書店)
- Palan, R. [1998] ‘Les fantômes du capitalisme mondial: l’economie politique internationale et l’ecole française de la regulation’ *L’annee de la regulation*, vol. 2
- Paul [50?/2001] ‘Premiere Epître de Paul aux Thessaloniens’ in *La Sainte Bible: traduite d’apres les textes originaux hebreu et grec* [2001], Alliance Biblique Universelle
- [57 58?/2001] ‘Epître de Paul aux Romains’ in *La Sainte Bible* [2001]
- Petit, P. [1998] ‘Formes structurelles et regime de crissance de l’apres fordisme’ *L’annee de la regulation*, vol. 2
- Polanyi, K. [1957] *The great transformation: the political and economic origins of our time*, Beacon Press (吉沢英成 / 野口武彦 / 長尾史郎 / 杉村芳美訳 [1975] 『大転換：市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社)
- Reiffers, J. L. [1982] *Economie et finance internationales*, Bordas
- Robles Jr, A. C. [1994] *French theories of regulation and conceptions of the international division of labour*, St. Martin’s Press
- Ruggie, J. G. [1983] ‘International regimes transaction, and change: embedded liberalism in the postwar economic order’ in Krasner [1983a]
- Saul, S. B. [1960] *Studies in British overseas trade 1870 1914*, Liverpool University Press (久保田英夫訳 [1980] 『イギリス海外貿易の研究』文眞堂)
- Scott, A. J./Storper, M eds. [1986] *Production, Work, Territory: The geographical anatomy of industrial capitalism*, Allen & Unwin
- Stopford, J. M./Wells, L. T. [1972] *Managing the multinational enterprise*, Longman (山崎清訳 [1976] 『多国籍企業の組織と所有政策：グローバル構造を超えて』ダイヤモンド社)
- Strange, S. [1983] ‘Cave! hic dragones: a critique of regime analysis’ in Krasner

- [1983a]
- [1994] *State and Market: An introduction to international political economy*, 2nd ed. (西川潤 / 佐藤元彦訳 [1994] 『国際政治経済学入門：国家と市場』 東洋経済新報社)
- UN [1981] *The standard international trade classification (SITC) : Rev. 2* (アジア経済研究所訳 [1983] [1984] [1985] 『標準国際貿易商品分類：改訂第2版, 第 . . . 巻』 アジア経済研究所)
- [1994] *The standard international trade classification (SITC) : Rev. 3* (岡川千勝訳 [2000] 『標準国際貿易商品分類：改訂第3版』 オムニ情報開発株式会社)
- UNCTAD [2010] *Handbook of statistics*
- U. S. Department of Commerce [1985] *U. S. high technology trade and competitiveness*
- Vernon, R. [1966] International investment and international trade in the product cycle, *Quarterly Journal of economics*
- Vidal, J. F. [1998] 'La regulation et l'international: remarques sur l'article de R. Palan' *L'annee de la regulation, vol. 2*
- [1989] *Les fluctuations internationales*, Economica
- [2002] 'Les regimes internationaux' in Boyer/Saillard
- Theret, B. [1992] *Regimes economiques de l'ordre politique: esquisse d'une theorie regulationniste des limites de l'etat*, PUF (神田修悦・中原隆幸・宇仁宏幸・須田文明抄訳 [2001] 『租税国家のレギュレーション』 世界書院)
- Wallerstein, I [1979] *The capitalist world economy: essays* Cambridge, Cambridge University Press (藤瀬浩司 / 浅沼賢彦 / 金井雄一訳 [1987] 『資本主義世界経済1』 日南田静真監訳 [1987] 『資本主義世界経済2』 名古屋大学出版会)
- 安孫子誠男 [2012] 『イノベーション・システムと制度変容：問題史的省察』 千葉大学経済研究叢書 8
- 井上泰夫 [1996] 『世紀末大転換 を読む：レギュレーション理論の挑戦』 有斐閣
- 宇仁宏幸 [1998] 『構造変化と資本蓄積』 有斐閣
- 石黒馨 [1998] 「訳者あとがき」(R. O. コヘイン 『覇権後の国際政治経済学』 所収)
- 大塚久雄 [1978] 『生活の貧しさと心の貧しさ』 みすず書房
- 大野耐一 [1978] 『トヨタ生産方式：脱規模の経営をめざして』 ダイアモンド社
- 岡本真也 / 楊枝嗣朗編著 [2011] 『なぜドル本位制は終わらないのか』 文眞堂
- 奥村和久 [1986] 「現代フランスの貿易構造：1983年度資料の再編に基づいて」 京都大学 『所
有理論研究会ワーキングペーパーシリーズ』 No. 2

- [1987] 「70年代のフランス工業製品貿易：世界貿易への統合の進展と地域別不均衡の拡大 (1)」 龍谷大学 『経済経営論集』 第27巻第3号
- [1988] 「70年代のフランス工業製品貿易：世界貿易への統合の進展と地域別不均衡の拡大 (2)」 龍谷大学 『経済経営論集』 第28巻第1号
- 小倉昌夫 [2003] 『福祉を変える経営：障害者の月給一万円からの脱出』 日経 BP 社
- 北原徹 [2012] 「書評：岡本真也 / 楊枝嗣朗編著 [2011]」 『証券経済研究』 第77号
- 黒田篤朗 [2001] 『メイド・イン・チャイナ』 東洋経済新報社
- 小島清 [2003] 『雁行型経済発展論 (第1巻)：日本経済・アジア経済・世界経済』 文真堂
- 斉藤日出治 [1992] 「訳者解説」 (M. アグリエッタ 『通貨統合の賭』 所収)
- 佐伯尚美 [1990] 『ガットと日本農業』 東京大学出版会
- 坂井昭夫 [1998] 『国際政治経済学とは何か』 青木書店
- 櫻井公人 [2011] 「国際政治経済学の過去と未来」 日本国際経済学会編 『国際経済』 第62号
- 清水耕一 [1990] 「蓄積体制とレギュラシオン：レギュラシオン・アプローチの方法論的問題」 同志社大学 『経済学論叢』 第41巻第4号
- 新宅純一郎 / 天野倫文編 [2009] 『ものづくりの国際経営戦略：アジア産業地理学』 有斐閣
- 関下稔 [2010] 『国際政治経済学要論：学際知の挑戦』 晃洋書房
- 関根猪一郎 / 木村次郎 / 大島重衛 / 小西一雄 [2000] 『金融論』 青木書店
- 立石剛 / 星野郁 / 津守貴之 [2004] 『現代世界経済システム：グローバル市場主義とアメリカ・ヨーロッパ・東アジアの対応』 八千代出版
- 田中素香 [2010] 『ユーロ：危機の中の単一通貨』 岩波新書
- 中原隆幸 [2010] 『対立と調整の政治経済学：社会的なるもののレギュラシオン』 ナカニシヤ出版
- 鳴瀬成洋 [2001] 「Embedded Liberalism の解体と再編：グローバリズム，マルチラテラリズム，リージョナリズム」 神奈川大学 『商経論叢』 37巻2号
- 西川潤 [1990] 「世界システム論からレギュラシオン理論へ」 『経済セミナー』 第423号
- [2000] 『人間のための経済学：開発と貧困を考える』 岩波書店
- 橋本孝 [2009] 『奇跡の医療・福祉の町ベテル：心の豊かさを求めて』 西村書店
- 原田祐治 [2005a] 「制度における補完性と階層性：B. アマールによる制度理論へのアプローチ」 名古屋大学 『経済科学』 第52巻第2号
- [2005b] 「制度理論としてのレギュラシオン理論：レギュラシオニスト第2世代の試み」 『季刊経済理論』 第42巻第2号
- [2005c] 「訳者解題」 (B. アマール 『五つの資本主義』 所収)
- 平田清明 [1969] 『市民社会と社会主義』 岩波書店
- 平野泰朗 [1996] 『日本的制度と経済成長』 藤原書店

- 藤瀬浩司 [2012] 『20世紀資本主義の歴史Ⅰ：出現』名古屋大学出版会
- 藤本隆宏 [2001] 『生産マネジメント入門Ⅰ：生産システム編』日本経済新聞社
- [2012] 『ものづくりから復活：円高・震災に現場は負けない』日本経済新聞社
- ボワイエ, R. / 山田鋭夫編 [1993] 『危機：資本主義』藤原書店
- [1996] 『ラポール・サラリアル』藤原書店
- [1997] 『国際レジームの再編』藤原書店
- 松村文武 [1993] 『体制支持金融の世界：ドルのブラックホール化』青木書店
- 松本元 [1996] 『愛は脳を活性化する』岩波書店
- [1999] 「アルゴリズム獲得システムとしての脳」『実験医学』第17巻第16号
- 水野和夫 [2007] 『人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか』日本経済新聞社
- 三宅義夫 [1968] 『金：現代の経済におけるその役割』岩波新書
- 宮崎義一 [1986] 『世界経済をどう見るか』岩波新書
- [1988] 『ドルと円：世界経済の新しい構造』岩波新書
- 毛利健三 [1978] 『自由貿易帝国主義』東京大学出版会
- 八木紀一郎 [2007] 「世界市場の統合とガバナンス問題：全般的危機 から 埋め込まれた自由主義 へ？」(山田 / 宇仁 / 鍋島編所収)
- 山田鋭夫 [2008] 『さまざまな資本主義：比較資本主義分析』藤原書店
- 山田鋭夫 / 宇仁宏幸 / 鍋島直樹編 [2007] 『現代資本主義への新視角：多様性と構造変化の分析』昭和堂
- 山本吉宣 [2008] 『国際レジームとガバナンス』有斐閣
- 吉富勝 [1998] 『日本経済の真実：通説を超えて』東洋経済新報社
- [2003] 『アジア経済の真実：奇蹟，危機，制度の進化』東洋経済新報社
- 若森章孝 [1993] 『資本主義発展の政治経済学：接合理論からレギュラシオン理論へ』関西大学出版部
- [1996] 『レギュラシオンの政治経済学：21世紀を開く社会 = 歴史認識』晃洋書房